



Title	式子内親王歌の同時代的視点：「正治初度百首」を中心に
Author(s)	松本, 成葉
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2021, 4, p. 23-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/84823
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

式子内親王歌の同時代的視点

―「正治初度百首」を中心に―

日本文学 博士前期課程 二年

松本 成葉

はじめに

式子内親王は『新古今和歌集』に6首入集し、入集歌数が全体で第5位、女性歌人としては新古今時代を代表する女流歌人の一人である。新古今時代歌人たちは、歌道家を中心に歌壇を形成し歌合や歌会などに参加することによって、切磋琢磨しながら詠作活動を行っていた。しかしながら、式子内親王にはそのような活動に参加した記録は残っておらず、従来「孤高の歌人」として時代から引き離され「独自性」に着目し論じられてきた。また、また数少ない式子を時代の中でとらえた先行研究は、文治・建久年間(1190-99)に起きた藤原定家達の新風和歌活動の影響を受け、新風歌人と「詞」が共通している点を挙げ、和歌一首一首を検討した論である。

ところで、式子内親王の現存する和歌のほとんどが「百首歌」の形式で詠出されたことは、家集や勅撰集の詞書から明らかになっている。この「百首歌」は一人の歌人が百首の歌をよみまとめたもので、当時の和歌詠出の形式としてスタンダードなものであった。「百首歌」には「組題百首」という与えられた百の題に基づいて題に沿ながら詠む形式と、「部立百首」という部立というテーマと歌数だけが指定され、歌人毎に排列を意識して部立をまとめる必要がある形式が存在した。式子内親王の現存する百首歌はすべて「部立百首」という百首歌の形式を持っている。部立百首を詠む際に歌人たちは、和歌をただ詠むだけではなく、和歌をどのように排列するかも重要視された。部立百首において和歌の排列には歌人の工夫が凝らされているのである。

しかしながら、式子内親王歌の研究は、歌の表現や出典、詞について検討した論考が多く、式子が部立百首で詠作活動を行っていたことに着目し、百首歌の排列を分析した体系的な論考は未だ確認できない。

そこで本発表では、式子内親王を含め二二人の歌人が詠進した『正治初度百首』(一二〇〇年)の「春」部二十首を調査し、式子内親王の歌の排列について同時代歌人の排列と比較しながら検討していきたい。

和歌の排列

和歌の排列は、勅撰集を模倣し和歌のテーマから季節の展開する順に行われる伝統がある。春部の場合において季節の展開は概ね早春・仲春・晩春に区分することができ、テーマは以下のよう

早春 立春・子日・若菜・鶯・梅・柳・早蕨・春雨
仲春 桜

小田剛「式子内親王―詞の面よりみた三つの百首の性格―」(『国文学研究ノート』第一八号、一九八五年九月)、奥野陽子「式子内親王」百首の歌境―詠歌主体と花との関わりを通して―(『光華女子短期大学研究紀要』第三一集、一九九三年十二月)

部立百首である『正治初度百首』では、歌人は裁量によってテーマを取捨選択しているため、歌人ごとによって使用するテーマは異なっている。そのために、テーマごとの和歌を一概に比較することはできない。しかし、春のテーマの中でも桜はもともと重きを置かれているテーマであり、桜をテーマにした和歌は全ての歌人が詠んでいる。また、一人を除く歌人が桜をテーマにした和歌を複数排列している。よって、本発表では、桜をテーマにした和歌の排列について検討していきたい。なお、桜をテーマにした和歌の抽出方法は以下の通りである。

【資料1】判断基準

① 桜という詞がある
いま桜咲きぬと見えてうす曇り春にかすめるよのけしき哉（二二二 式子）↓桜がテーマの和歌
② 桜という詞がない場合
♪ 花という詞がある（花は、新古今時代においては桜を意味する詞となっていた） 今日も又あかぬながめに暮はてぬ哀立ちき花の陰哉（三一八 守覚）↓桜がテーマの歌 ♪ 雪という詞がある（桜を雪に見立てている） 庭の雪うつろふ花の梢まで尋ねぬ人の心をぞ見る（一四一六 家隆）↓桜がテーマの歌
これらを判断基準とし、詠進者ごとに歌の数を表としてまとめたのが【表1】である。

春部桜歌の排列について

【表1】正治初度百首「春」二十首桜歌群（降順）

式子	9
隆信	9
定家	8
守覚	7
慈円	7
寂蓮	7
後鳥羽院	6
惟明	6
忠良	6
俊成	6
家隆	6
丹後	6
良経	5
範光	5
実房	5
讃岐	5
隆房	4
小侍従	4
季経	3
経家	3
師光	3
通親	1

【表1】から式子内親王は二十首のうち九首桜をテーマにした和歌を詠んでいることがわかる。これは春部のほぼ半数を占めており、彼女が桜を春のテーマとして重要視していたことが読み取れる。しかしそれは、式子だけの傾向ではなく、隆信（九首）や定家（八首）、寂蓮（七首）なども同様の傾向を持つことが読み取れる。一方式子らと反対に桜の歌数が少ない歌人がいる。道親（一首）、季経（三首）、経家（三首）、生蓮（三首）などがあげられる。すべての歌人が桜歌の排列に重きを置いているわけではないことが【表1】から判明した。

正治初度百首を取り巻く同時代歌人

正治初度百首が詠進された当時、和歌と正治が密接に関わっていた時代であった。優れた和歌を読むことによって昇殿がゆるされるようになったのもこの時代である。歌道家は家ごとに歌の技術や理念両面においていかに歌を詠むかをまとめた歌学をまとめていくことになった。正治初度百首詠進当時、歌壇は二つの歌道家の派閥に別れていた。藤原季経・経家を中心とする六条藤家

和歌本文は、久保田淳監修 和歌文学大系49『正治二年院初度百首』（明治書院、二〇一六年）によった。

派閥と、藤原俊成・定家を中心とする御子左家派閥である。そして、二つの歌道家が同人数詠出しているのが『正治初度百首』である。派閥と所属する歌人をまとめたのが【資料2】である。

【資料2】派閥歌道家 なお、直系の人物には傍線を付した。

六条藤家系 季経・経家・通親・範光・忠良・実房・隆房・師光・小侍従
御子左家系 俊成・定家・良経・慈円・隆信・家隆・寂蓮・丹後・讃岐

【表1】では、桜歌の排列を重視する歌人と、しない歌人に分類することができていることを明らかにした。今【表1】に【資料2】を重ね合わせたものが、【表2】である。分類のため御子左家には編みかけを付し、皇族はゴシック体にした。

【表2】 桜歌と派閥

式子	9
隆信	9
定家	8
守覚	7
慈円	7
寂蓮	7
後鳥羽院	6
惟明	6
忠良	6
俊成	6
家隆	6
丹後	6
良経	5
範光	5
実房	5
讃岐	5
隆房	4
小侍従	4
季経	3
経家	3
師光	3
通親	1

【表2】からは桜歌の数と派閥の関連性が窺える。六条藤家直系季の直系の季経、経家は桜歌を三首しか詠んでいない。また桜歌が4首以下の歌人をみるとすべて六条藤家の歌人であることがわかる。一方、御子左家直系の歌人である俊成は六首、定家は八首詠んでいる。他の御子左家派閥に属する歌人の隆信は九首、慈円は七首、寂蓮も七首詠んでいる。ここから御子左家系の歌人は、六条藤家の歌人と比較して春二十首において桜歌を重視する傾向があることがわかる。この六条藤家と御子左家の排列の特徴に当て嵌めて考えると、式子内親王は御子左家派閥の歌人であり、もともと御子左家の傾向を強くもつ歌人といえるのではないだろうか。

まとめ

先行研究は、式子内親王の独自性に注目して論じられることが多かった。また、和歌一首一首の詞の検討が研究の中心であった。

しかしながら、式子の和歌活動の中心は百首歌という詠法であり、必ずしも実人生を読み込むものではない。そして百首歌は、百首で一つの作品であるため、歌人は和歌の配列にも工夫を凝らしていた。百首歌の検討において配列論は欠かせない問題である。

『正治初度百首』は同時代歌人二二人が詠進した新古今時代において重要な部立百首である。この『正治初度百首』『春』二十首のテーマ、中でも桜をテーマにした和歌に注目すると、六条藤家歌人と、御子左家歌人では桜歌の重視において異なった傾向が見られた。その傾向を式子内親王に適用すると、式子内親王は御子左家的特徴を持つことが明らかになった。このことから、百首歌の排列から歌人の同時代性があきらかになるのではないかと考えている。百首歌において、和歌一首一首だけを重視するのではなく、和歌の排列に着目することで式子内親王の新たな一面を捉えたい。